

東京都市大学

男

女

共

同

参

画

室

SANKAKU Letter No.3

育メンリポート NO.8 工学部都市工学科 吉川弘道先生

非育メンの、それなりの奮闘顛末記
—可愛い子には旅をさせよ—

私はご飯が炊けない。風呂掃除も腰痛を言い訳に滞りがち。砂遊び・授業参観・運動会は、随分と昔で覚えていない。ということで、本欄には不相応なのですが、娘二人を授かった非育メンの他力本願流奮闘記として、お許し下さい。

昔は良かった、育メンと言う言葉がなかったし、‘亭主元気で留守がよい’の国民運動は何処へ行ってしまったのか(この時点でイエローカードです)。家事が苦手なら、ハードよりソフトで挽回ということで、稽古毎は結構させたし、海外経験については、随分と頑張った。

事の始めは、小生のコロラド大学での海外赴任(Visiting Professor)の際のアメリカ滞在でした(1992-3年)。自然が豊かで、家族が安心して住める所を念頭に、コロラド州ボルダーを選んだ。娘二人は地元のアイゼンハワー小学校に通い、大きな経験・試練であったことは間違いない(イクメンポイントを少し挽回)。また、オーストリアでの講演(1995年頃)の際も、家族4人で出掛けた。中学受験を控え、行きたくないという長女を、「少しぐらい大丈夫だよ」、「飛行機の中でも勉強できるし」と言って無理やり同行させた。

その後、二人とも理系は無理と言うので、それならば英語が大切とばかり、先ず、長女には高校留学を勧めた。たまたま、カナダ大使館にて留学フェアがあり、手続きをしてしまった。渡航/ビザ手配、ホームステイを父親が仕切って、長女を説伏せた。

いよいよ旅立ちの日、成田空港の出国ゲートで、「【両親】健康と交通事故に気を付けて」、「【娘】この携帯電話、解約しておいて、1年は帰ってこないから」と送り出した。(男には、特に気を付けろ！は言葉にならなかった)。

ただ、もし搭乗口にて気が変わり、泣いて戻って来たら優しく迎えようと、ゲートの前で一時間ほど妻と待っていた。後から聞いたが、バンクーバーまで機中一睡もしなかったとのこと。うーん、16歳にて単身留学は早過ぎたか、の悔悟が頭を過るも、機内の映画が面白かったのだろうと、勝手な忖度(やはり心配になり、私はすぐに、現地Home Stay先に挨拶に行っていた)。

結局、カナダBritish Columbia州にて、長女は高校卒業、次女は大学留学を終え、やがて二人とも語学が活かせる仕事を選んだ。今思えば、無謀というか大胆な(人任せ)教育でもあったが、TOEICで900点アップを取るに至り、‘他力本願流非育メン’のそれなりの成果ということで、何とか埋合せできたと思っている(同時に、妻にも許しを請っている)。

今は、長女は一児の母、次女は元気に会社勤め。実のところ、子供の成長によって父親も育てられ(立派な‘育父娘’でした)、子母父の‘三方良し’ということで、めでたく本文を終わらせてください。



ブダペスト(ハンガリー)での出張の折り、当地で購入したおみやげの民族衣装を着る二人。(1987年夏、自宅にて)



コロラド大学赴任中は、折りに触れ周辺の大自然を満喫した(1992年初夏、Rocky Mountain National Park)



長女の高校留学最後の卒業式、校長先生との記念写真。2002年初夏、Mount Douglas Secondary School (カナダ・ビクトリア)



次女の留学先での授業風景
International Eco-Tourismでのプレゼンテーション
(2008年秋季学期: Capilano University, North Vancouver)